

DALS ニュースレター No. 8

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

*Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life*

2005年1月11日

## 目次

巻頭エッセイ「猫も死んでしまった」

熊野純彦

研究会案内・報告

Roger Crisp 教授講演研究会 報告

一ノ瀬正樹

W. フート氏&W. キッペス氏講演研究会「医療とスピリチュアリティ」報告

島菌進

シンポジウム「べてるに学ぶ - 《おりていく》生き方」報告

上野千鶴子

ヴィクトル・シュニレルマン研究会「『ソヴィエト人』から『有機体的共同体』へ」報告

島菌進

シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」報告

一ノ瀬正樹

『死生学研究』第四号目次

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

## 「猫も死んでしまった」

熊野 純彦

実家で猫を飼っていた。もう25年もまえのことになる。

猫はとりわけ母に懐いた。猫を可愛がることで母もまた、子どもたちが大きくなって、行き場のなくなった過剰な愛情と折り合いをつけていたようにもおもわれる。そればかりではない。兄や姉がつぎつぎと巣立ち、家にはやがてしじゅう不機嫌なすえっ子だけがのこされたとき、すでに老いはじめていた父母と私とのあいだをとりもったのも、この猫であった。「いつでも猫の一挙一動が話題の中心となり、時ならぬ笑の波がそこから起つて来る。丁度静かな森の中の池に何処からともなく小波が起るやうだ」。西田幾多郎が晩年の随筆で書いている、そのとおりであった（「暖炉の側から」）。

猫が病気になったのは、家にきてから10年目のことである。動きが目に見えて鈍くなった。もともとは元気すぎるくらい元気で、かれにとってはライバルであった父にたいしてときに戦いをいどむほどであっただけに、哀れがつのった。むかし読んだ漱石の一節をおもい浮かべた。猫は、ほんとうに、「動かなければ淋しいが、動くとも淋しいので、我慢して、じつと辛抱してゐる様に見えた」（永日小品）からである。

老人ふたりが、たがいのあいだに抱きかかえるようにして病院に連れていき、猫はやがて、かたく目を瞑ってもどってきた。注射をされて、すぐに息をひきとったそうである。手の施しようもない、末期の腎不全であったと聞いている。

その翌日は首都圏に時ならぬ雪が降りつもり、手伝おうとする私の手を払いのけるようにして、老母がひとりその雪をかきわけ、さらに土を掘って、庭に埋めた。「ごめんね、ごめんね」とつぶやく老女の頬をすべり落ちたものが、雪に点々とちいさな穴となった。

秘かに敬愛していた社会思想史家の良知力氏が、亡くなる半年前に「春と猫塚」という断想を『未来』に寄せている。すでにガンに冒されていた良知氏は、ペペという愛猫に先だたれ、やはり庭に埋葬した。「死んでからもう二月半か。もうペペ、骸骨になっちまったかな」。何気なく私が非情な言葉を口にすると、妻は怒って歯をむき出した。「何言ってるの。ペペはちゃんと元のまま、生まれたときと同じ可愛い顔をして眠っていますよ！」/私は黙った。ただ木の下に眠るペペへの想いを私自身の移ろいの姿に重ねたと、一文はむすばれる。家をうつることになり、猫の墓のゆくすえを気にかけていた母に、私は雑誌のコピーをしめした。母は黙って目をとおり、なにもいわずに返してよこした。

\*

仕事部屋に、一枚だけ写真を飾っている。猫がステレオのうえに乗り、こちらに飛びかかろうとしている一瞬をとらえたものである。ときどき目がいくと、いまでもいろいろなことをかんがえる。高校から修士までを過ごし、私がひとり暮らしをはじめると、やがて親たちもそこから移っていったあの家の、せまい庭のかたすみで、猫はまだ眠っているのだろうか。死病にとりつかれたものが、たとえば親や子や、恋人であっても、私たちは注射によって眠らせる方法をえらんだのだろうか。そうした問いやさまざまなおもいが、浮かんでは消える。答えをもとめるつもりはない。ただいくたびも繰り返しかんがえるだけである。

\* 標題も西田の随筆による。

## Roger Crisp 教授講演研究会 報告

— 瀬 正 樹

去る 2004 年 10 月 14 日、東京大学法文 1 号館 215 番教室にて午後 3 時より、Roger Crisp 教授講演研究会・「健康ケア資源をどのように割り当てるか：QALY かそれとも徳か(How to Allocate Health Care Resources: QALYs or the Virtues?)」が開催された。平日にもかかわらず、さまざまな分野の関係者ら 20 名ほどが参加した。Roger Crisp 氏はイギリス Oxford 大学 St Anne's College のフェロウで、J.S. Mill など功利主義についての研究で知られており、現在のイギリス哲学を先導する若きリーダーの一人と目されている。今回、彼が深く関わりを持っている上廣倫理財団の活動の一つとして、来日を実現したものである。筆者は Oxford にて数度 Crisp 氏とお会いしたり講演を聴いたりしたことがあり、嬉しい再会でもあった。



Roger Crisp 教授

さて、Crisp 氏は、物理的・労力的・財政的に一定の限界があらざるをえない医療資源（医薬品、労働力、予算など）の分配はどのような考え方にのっとって行われるべきか、というかなり実際的かつ切迫した問題を主題として論じた。氏はまず、QALYs、すなわち「質で調整された余命」(quality-adjusted life years)の概念を説明し、それによって医療資源の分配を決定していくという道筋の可能性を検討する。QALYs とは、たとえば、健康な人の一年間(a)と、杖を使わなければ歩行できない人の一年間(b)と、寝たきりの人の一年間(c)とでは、同じ一年間といっても質が違うので、それぞれの一年間に質のウエイトを掛けて、数値として一年間の生命を表現し相違を明確化する(ここの例では  $a > b > c$  となる) という考え方である。この考え方を導入した場合、どのようにしたら全体としての QALYs の総計が増大するか、という観点から医療資源の配分が決定されることになる。これは明らかに功利主義の伝統に連なる考え方であり、Crisp 氏もその点に言及する。しかるに、功利主義は社会全体の幸福を旗印にすることによって、個人の視点を封印してしまいかねず、正義の徳が軽視されうる、と氏は論じ、こうした錯綜した事情に向かうには叡智(wisdom)が必要であると、そう結論づけた。伝統的な倫理学ときわめて現代的な問題意識とが、見事に溶け合った、実に刺激的な講演だった。質疑の時間になると、多様な視点からたくさんの質問が次から次へと出て、大いに盛り上がった。たとえば、医学部の甲斐教授から、QALYs のような EBM 的な提言はなかなか実際の現場には反映されないのではないか、という質問が出て、Crisp 氏は、イギリスでは実際に活用されていると答えた。また、島菌教授から、こうした計算で物事を決めるのは冷たい感じがする、という質問が出て、Crisp 氏は質の計算には個人の感性も取り込みうる、と応じた。また筆者も、Crisp 氏が QALYs を紹介するときに、「死」の QALYs はゼロで、それを基準にして、激しい苦痛に苦しめられている生の QALYs はゼロ以下であると算定できる、と論じたことに関して、そうした考え方は死によって苦痛が消滅するというに基づいているはずだが、そうだとしたら「死」は最初から高い QALYs を割り振られるべきことになってしまい、医療的意思決定の全体のスキームから逸脱してしまうのではないかと質問した。これに対し Crisp 氏は、安楽死の例を出し、場合によっては「死」に価値が認められることが確かにあるのだと応じてくれた。まだまだ問題含みだが、いずれにせよ、私たち「死生学の構築」プロジェクトにとって、こうした学際的領域のアップデートな研究が紹介された意義は大変に大きい。Crisp 氏と上廣倫理財団に深く感謝する次第である。質疑の後、再会を約して、講演研究会は成功裏に幕を閉じた。

## W. フート氏 & W. キッペス氏講演研究会 医療とスピリチュアリティ 報告

島 園 進

2004年10月30日(土) 東京大学本郷キャンパス法文1号館215教室において、精神分析を主要な方法とするミュンヘンの精神科臨床医で、スピリチュアリティに関わる著述家でもある Werner Huth 博士と、同じくドイツ人で日本滞在が長く、今は久留米の臨床パストラル教育研修センターの所長を務めるカトリック神父、Waldemar Kippes 博士による講演研究会が行われた。なお、この講演研究会は21世紀COE「死生学の構築」とともに、東京医学会および医学系研究科健康学習・教育学分野の共同主催によるものである。

当日はまず、ヴァルデマール・キッペス氏が死に行く人々へのパストラルケアの実践について具体例を織り交ぜながら、その意義を説明した。死に臨む人々に対して医療的なケアが求められるのは言うまでもないが、狭い意味での医療を超えるケア、とりわけスピリチュアルな次元のケアの必要性がますます認識されるようになってきている。だが、そもそもこれは死に臨む人々だけではないはずである。ホスピス運動によって理解が深まったことであるが、医療とスピリチュアリティの間には根源的な関係があると見なくてはならないだろう。



Waldemar Kippes 博



Almuth Huth 博士(左)、Werner Huth 博士

続いてヴェルナー・フート博士の講演に入ったが、妻で同じく精神科医である Almuth Huth 博士が講演原稿の一部を読み上げ、ご夫妻による協力の下で講演は進められた。日独対訳の原稿が用意され、聴衆はそれを見ながら講演を聞き、討議は金沢大学でドイツ文学を教える志村恵氏の通訳によって進められた。プロテスタントでありつつ、チベット等で瞑想を学び日頃瞑想に親しむ医師であるフート博士は、自らの精神科医としての経験を踏まえ、また医学の歴史を概観しながら議論を進めたが、講演の核心

部分は、人間の心と身体について、また医療とは何かについての原理論的な考察に基づくもので、哲学者となることも考えたという同氏らしい、独自の洞察の叙述だった。

フート氏は今日的な意味でのスピリチュアリティとは、「現実生活の全体に気配りする、スピリット(Geist)に従った生活」だとする。スピリットとは「私とは誰か」「人間とは誰か」という問いに関わるもので、個の自由や個性を成り立たせる根拠となるものであるとともに、また他者との交わりの中に宿らざるを得ないものである。また、それは身体や物質と区別されつつも、両者は統一体として体験されるものである。医師と患者と病気との三者関係において客観化する態度は避けられないとしても、医療の実践においては常にスピリチュアルな次元が浮上してくる。生物学的(biologisch)な指標と伝記的(biographisch)な意味理解の2つの焦点の間を行き来する医学が必要になっている。自然科学的アプローチに片寄った近代医学は、スピリチュアルな次元を回復しつつ人間の全体性に関わるような実践へと展開していかなくてはならない。医学生からの質問に対して、フート氏は医学教育においてもそのような転換が必要とされるだろうと応答したのが印象的だった。

# シンポジウム「べてるに学ぶ - 《おりていく》生き方」報告

上野千鶴子

べてるが東大にやってきた！COE 死生学プロジェクトのおかげで、夢の企画が実現しました。

当日はべてる側が総勢7名のオールスターメンバーズ。新築なった医学部鉄門講堂は、立ち見まで出る盛況ぶりで、400名を超える参加者で埋まりました。うち東大関係者は半数ほど。学外者の関心も高かったことがわかります。開催場所のわりに医学部の関係者の参加が少なかったのが残念でしたが。文学部のプロジェクトとは言え、死生学は理科系にもっとアピールしてもよいかもかもしれません。

べてるは北海道浦河で、統合失調症の患者さんたちが作りあげた仕事と暮らしの自助組織。当事者性を大切に、病気と共存していく「おりていく生き方」を実践しています。かたや東大および東大生は「のぼっていく生き方」の実践者と見なされています。東大とべてる、この出会いから、どんな化学反応がおきるか？当日のドキュメントのさわりをお伝えしましょう。

まず壇上のスピーカーから。当日も「べてる名言集」が次々にとびだしました。

「自分の病気にはさからえない」河崎寛（べてるメンバー）

「分析は終わった。でもそれで？」渡辺瑞穂（べてるメンバー）

「そばにいただけで安心する関係」早坂潔（べてるメンバー）

「医者には畏れとわきまえが必要。仕切って、やりすぎではいけない」川村敏明（浦河赤十字病院精神神経科部長）

「ドクターのプライドとつきあうのはたいへん」伊藤恵理子（浦河赤十字病院ソーシャルワーカー）

「やけくそで信じる」向谷地生良（浦河赤十字病院ソーシャルワーカー、北海道医療大学助教授）

「当事者の家族が抵抗勢力になっている」田口ランディ（作家）

「研究とは何があったかをきちっと書き留めること」市野川容孝（東大総合文化研究科助教授）  
会場の参加者の反応についても、アンケートから一部、ご紹介しましょう。

「実に異色なシンポ!!!」

「2時間半あっという間でした。」

「こんなに楽しいシンポジウムは初めてでした。」

「歌を聴いて涙が出ました。仕事を休んできたかがありました。」

「当事者が自分たちのことを公言する姿に感動した。」

「病気は決して悪いことでも不幸なことでもない、と少しでも多くの人が思えるといい。」

「『のぼりたい』と『おりたい』のはざまにいる私。」

会場にはべてるのおっかけをやっているディープな参加者も。そのおひとりから、あとでメールでご感想をいただきました。

「べてるの講演会を聞くたびに、いつも浦河に行くしかないのか、と向谷地さんのカリスマに無力感を抱いて帰ったものですが、今度のシンポは違いました。自分の足元でべてるをつくろうという気分になったのは初めてです。」

これは、コーディネーターのわたしがひそかにねらっていたとおりの感想でした。べてるはこんなにもてはやされるのに、なぜ各地に拡がらないのか、抵抗勢力はあるとしたら何なのか...に問いを立てて、食い下がりましたから。

プログラムになかった出演者、べてるの木林美枝子さんのべてる替え歌の熱唱から始まり、ふたたび木林ソングでクロージングを決めた進行は、笑いと感動を呼びました。あらかじめ用意したシナリオは、最初の数分でふっとび、飛び入りあり、徘徊ありのハプニングの連続。その一端は朝日新聞（2004年12月1日付）でも紹介されています。シンポの全貌はいずれ刊行される報告書をおたのしみに。

## ヴィクトル・シュニレルマン研究会 報告

### 『ソヴィエト人』から『有機体的共同体』へ - ロシアとウクライナの新異教主義（ネオ・ペイガニズム）概観

島 蘭 進

2004年12月3日（金）東京大学本郷キャンパス法文1号館215教室において、Victor Shnirelman 博士講演研究会が開催された。シュニレルマン氏はロシア連邦科学アカデミー・民族人類学研究所の主任研究員で、ロシアとウクライナのネオペイガニズムについて、多くの業績をあげている文化人類学者である。この度の氏の講演は From the “Soviet people” to “organic community”: the Russian and Ukrainian Neo-Pagans’ outlook (「ソヴィエト人民」から「有機的共同体」へ ロシアとウクライナのネオペイガニズムの世界観)と題され、1980年代以降、ロシアとウクライナで顕著に興隆しているネオペイガニズムについて紹介しながら、そこに現代人の時空間認識や死生観の変化を読みとろうとするものである。



Victor Shnirelman 博士

ロシアとウクライナでは、1980年代からネオペイガニズムの興隆が見られ、大きな都市には必ず彼らの集団が見られ、その総数は数千人に上るといふ。ペイガンとは「異教の」を意味するが、キリスト教から見て劣った異教を名指す用語を逆手にとって、外来宗教流入以前の真正の民族的宗教伝統を指すものとして用いられている。ソヴィエト連邦と東欧社会主義世界の崩壊に伴い、社会主義的な普遍主義、人間（人民）主義、進歩主義が失墜する。その中でさまざまな伝統への回帰の潮流が生じるが、「悠久の民族の血」というべきスラブの伝統に戻ろうとするのが、このネオペイガニズムを支持する人々である。民族的ナショナリズム(ethnic nationalism)と特徴づけることができる立場だが、その政治的志向は一様ではない。反ユダヤ主義や排外主義に傾いているものもあれば、穏健で融和的な姿勢を示すものもある。集団はおおかた小さなもので多様である。

多様であるとはいえ、世界観には共通点が多い。かなり広く分け持たれている特徴として、有機的共同体の理念がある。民族的な血の共有に基づく「不死の共同体」が長期にわたって続いてきたとするもので、時にはその起源は紀元前1万年以前とされる。このように一方で直線的時間観に基づく悠久の有機的生命の連続性が説かれるが、他方、循環的な時間観に基づいて死と再生の循環や永遠回帰が説かれもする。西洋のエソテリズムの伝統を引き継ぎ、ミルチャ・エリヤデヤルネ・ゲノンが持ち出されたり、「6の人種の黄金時代」の到来が説かれたりもする。ネオペイガニズムの興隆は世界的な動向で、先住民運動と共通点の多いものもあり、英米などではフェミニズムと結びつくものが有力だが、ロシアとウクライナの場合は男性中心主義が顕著である。また、ネオナチに通じる外国人排除の動向との連関も見逃せない。

現代ロシアや東欧社会の研究という観点からの質疑応答とともに、現代人の死生観の動向という観点からの討議が行われた。死を遠ざける文化が支配し、死生観を見失う傾向が強いとされる現代人だが、そのよるべなさを補うべく、さまざまな運動が展開している。世界的な視野をもってそのような動向を注視すべきこと、その政治的含意に留意すべきことを促す有益な講演研究会であった。

# シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」報告

一ノ瀬 正樹

去る 2004 年 12 月 11 日・12 日の二日間に渡って、東京大学文学部一番大教室にて国際シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」が開催された。今回のシンポジウムは、医療的意思決定 (Medical Decision) に焦点を合わせて、その周辺を論じることを主な狙いとしたものである。私たちの COE シンポジウムのなかでかなり理論的な側面を担った企画であると同時に、生死をめぐる哲学・倫理学・医学・法学・経済学・心理学を通底する学際的なテーマをはじめて我が国において顕在化させるという、学術的にも大きな期待が込められたイベントであった。全体の構成は、11 日の第一部はイギリスなどから招いたスピーカーを交えて哲学的・理論的な検討を行い、12 日の第二部は日本人研究者によるパネルディスカッションという形で実践的な問題を討議する、というものであった。以下、当日の様相について概略的に報告する。さらに詳しい内容の報告は後ほど proceedings を発行し、そこで行う予定である。

第一部「The Philosophy of Facing Uncertainty: Epistemic Limits, Probability, and Decision」(不確実性に向かうことの哲学：認識的限界・確率・意思決定)

午前 11 時に本 COE 拠点リーダーの島園進教授から開会の挨拶があり、二日間の日程が幕を開けた。第一部は原則として英語を使用言語としつつ、同時通訳のシステムも利用された。最初に筆者一ノ瀬が「A Decision-Theoretic Approach to Problems of Confirmation: In View of Medical Decision」と題した報告を石黒ひで氏の司会のもとで行った。確証についての有力な理論であるベイズ主義を取り上げ、その難点を回避するには確証のプロセスに潜在する意思決定理論的なアスペクトに眼を向けることが必要だとして、とりわけ医療での「診断」の場面を確証の例として取り上げて論じた。



一ノ瀬正樹氏



加地大介氏



Colin McKenzie 氏

埼玉大学の加地大介氏がスピーカーのベイズ主義への最終的態度的についての、慶應大学の Colin McKenzie 氏がスピーカーの挙げた例と経済学での例との比較についての、コメントを加え、その後質疑を行った。

午後の最初にメルボルン大学およびセント・アンドリュース大学の Graham Priest 氏が「The Limits of Knowledge」と題した報告を野本和幸氏の司会にもとで行った。Priest 氏はイギリス出身の論理学者で、矛盾を一部認める論理の体系、paraconsistent logic、の創始者として有名である。今回は、知られることが可能なことは実際に知られている、という逆説的帰結を導く「フィッチの議論」をめくって、nt logic を援用しながら、必ずしもそうした帰結に至る必然性はないこと、ひいては知りえない真理も存在すること、が論じられた。きわめて論理的だが、ある意味で宗教や形而上学にほぼ接した議論であったといえよう。慶應大学の飯田隆氏が「フィッチの議論」をむしろ容認してみるという選択肢についてコメントした後、質疑が活発に行われた。



Graham Priest 氏



飯田隆氏



繁樹算男氏



Colin Howson 氏

次に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの Colin Howson 氏が、「The Logic of Probable Inference」と題した報告を土屋俊氏の司会のもとで行った。Howson 氏はベイズ主義の世界的な推進者の一人で、その意味で主観的確率に重きを置く立場にいると一見思われるが、今回の報告では、確率的推論が実は演繹的推論の一つとして、つまり演繹論理として、理解できることをいろいろな解釈を加えながら論じた。実践に用いられる推論の論理性という、高度に学問的な主題を専門家が直接的に論じる場を私たちの COE が設けることができた

のは喜ばしい。東京大学の繁樹算男氏が、確率的推論には本来的のやはり経験的かつ実践的な性質があるのではないか、という趣旨のコメントを加え、それを踏まえて質疑が行われた。

最後に、ロンドン大学ユニバーシティ・コレッジの Donald Gillies 氏が「Subjective and Objective Probabilities in Medical Decision」と題した報告を筆者一ノ瀬の司会のもとで行った。Gillies 氏は確率の哲学の専門家で、先頃近著 Philosophical Theories of Probability の日本語訳が発刊されたばかりである。今回の発表では、医学的診断に用いられる確率は、とりわけ診断をサポートするコンピュータ・システムに関しては原則として頻度による客観的確率が用いられるべきであるが、症例の少ない状況下では医師たちの主観的確率も併用すべきだ、という主張が展開された。確率の多元論を提唱してきた Gillies 氏ならではの発表であった。東京都立大学の丹治信春氏が、医師たちの確率算定は果たして哲学的な意味での主観的確率と同じものといえるのか、といったコメントをして、その後質疑が活発に行われた。



Donald Gillies 氏



丹治信春氏

終了後、フォレスト本郷にてレセプションが催された。社会心理の秋山弘子教授が司会を行い、まず人文社会系研究科副研究科長の中地義和教授にご挨拶をいただいた後、懇親を深めた。

## 第二部「生き死にの選択」(Choices about Life and Death)

二日目は午後1時から開始された。最初に筆者が一日目とのつながりをつけるため短い挨拶をしたのち、司会の鳥取環境大学長の加藤尚武氏がパネルをとりしきった。最初に神戸大学の鎌江伊三夫氏(医師でもある)が「医学・医療における意思決定」と題した提題を行った。鎌江氏は医療的意思決定の日本における数少ない専門家の代表である。今回はまず、いわゆるEBM(evidence-based medicine)についての大変に的確な解説が与えられ、その過程で一日目のいくつかの報告への言及もなされ、理論的な問題と実践的な問題が深くリンクしている事情が浮かび上がってきた。EBMの利点と難点とが公正に分析された後、「同意から決定の共有へ」という印象的なフレーズで提題が結ばれた。

次に、東北大学の清水哲郎氏が「医療現場における意思決定のプロセス」と題して提題を行った。清水氏は『医療現場に臨む哲学』で著名な方であり、今回は患者側に立った視点での提題が暗黙的に期待されていた。清水氏は医療現場での意思決定は当事者たちが共同で行う「合意」にほかならないと論じ、身体をbiologicalではなくbiographicalなものと考えてみるという可能性を示唆した。さらに、生死が問題になる選択に関して、二重結果論ではなく相応性論の適用可能性という問題が提起された。

三番目に、明治大学の鈴木利廣氏(弁護士でもある)が「生き死にの選択(医療訴訟の現場から)」という題目にて提題を行った。鈴木氏は医療裁判の専門家であり、そうした経験に基づいて日本のいくつかの代表的な医療裁判のあらましが紹介された。エホバの証人に対する輸血療法をめぐる訴訟、東海大学安楽死事件などである。基本的に自己決定権を重視する観点からの提題であるが、自己決定能力が欠けている場合の他者委託のケースについても言及があり、そこに多くの困難があることが指摘された。

最後に、東京大学研究員の麻生享志氏が「医療経済学の見方から」という表題のもと提題を行った。医療経済学的見方とは、この場合いうまでもなく、医療行為のコスト面に注目することにより医療政策を立案していくという道筋のことである。麻生氏は、医療費の地域差や疾病構造の変化など医療に特有の現象を検討しつつ、医療経済と市場原理との微妙な緊張関係をあぶり出した。最初の鎌江氏の提題と並んで、医療者サイドの視点からの問題へのアプローチであった。



提題後、パネリスト間の討議を経て、フロアを交えたディスカッションが行われた。医師や医学生など、現場に接する参加者からの質問も多く出て、加藤氏の、もう一人の提題者ともいうべき濃密なかつ軽妙な司会ぶりによって、議論は大いに盛り上がった。倫理学の熊野純彦助教授が閉会の辞を述べ、終了を迎えた。

以上、かなり学問的でハードな主題を設定したにもかかわらず、予想以上の聴衆が集まり、熱気を帯びた二日間となったこと、「死生学」の新しい側面が姿を現してきたこと、そのことを伝えて、シンポジウムのとりあえずの報告としたい。

# 本プログラム機関誌『死生学研究』第4号(2004年秋号) 発刊!

## 目次

- 松尾剛次 「中世における死と仏教 : 官僧・遁世僧体制モデルの立場から」  
八幡英幸 「胎児期を巡る道徳的思考 : 存在と人称の問題を中心に」  
佐藤知乃 「『曾我物語』の芸能化 : 江戸歌舞伎にみる鎮魂のゆくえ」  
鈴木健太 「生が苦であることについて : 「四門出遊」における生苦について」  
新島典子 「死別体験を生きること : 死者の存在感と生者の死生観」

## シンポジウム「死者と生者の共同性」報告

### 第一部

- 関根清三 総括報告  
関根清三 趣旨  
ギュンター・ペルトナー 現代の哲学的な死の理解の諸相  
関根清三 「現代の哲学的な死の理解の諸相」をめぐる三つの質問  
討議記録

### 第二部

- スティーヴン・F・タイザー 円環と線 : 仏教に於ける死の幾何学  
宮本久雄 ハヤトロギアの視点による生・死と他者問題の現場  
塩尻和子 クルアーンの死生観  
関守ゲイノー 日本の宗教的修行における生と死

### 第三部

- ジェームズ・フォード 20世紀の死者の運命  
渡辺哲夫 われわれとわたし : 統合失調症(精神分裂病)の世界から発せられる"死者と生者の共同性"への問い  
渡辺 裕 西洋音楽にみる死生観の「近代」  
ファビオ・ランベッリ 「死者と生者の共同性」におけるマイクロヒストリーや「非常地帯」的なもの : 渡辺哲夫の論文を読んで  
川村邦光 死者を掘り起こすこと  
菅野覚明 所感と質問  
討議記録

- 服部洋一 「ホスピスに見る死の分解 : 終末期ケアの現場への文化人類学からのアプローチ」  
種村隆元 「インド密教の葬儀」  
秋山茂幸 「内なる他性としての子ども から誕生と死へ : 教育学・死生学・精神分析」  
[書評論文] 古澤有峰 「医療福祉の文脈におけるスピリチュアルケア(Spiritual Care)の射程」  
欧文レジュメ

# 事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学・世話人>

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

一ノ瀬 正樹 <哲学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

大貫 静夫 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学仏教学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

武川 正吾 <社会学・世話人>

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

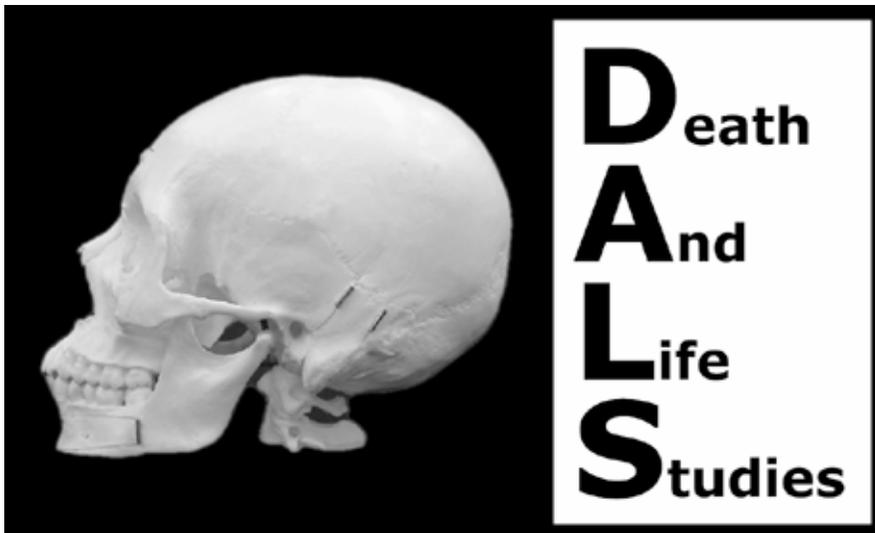
林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐 一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

秋山 弘子 <社会心理学>



「DALIS ニュースレター」

第8号

平成17年1月11日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島藺 進

TEL & FAX 03-5841-3736